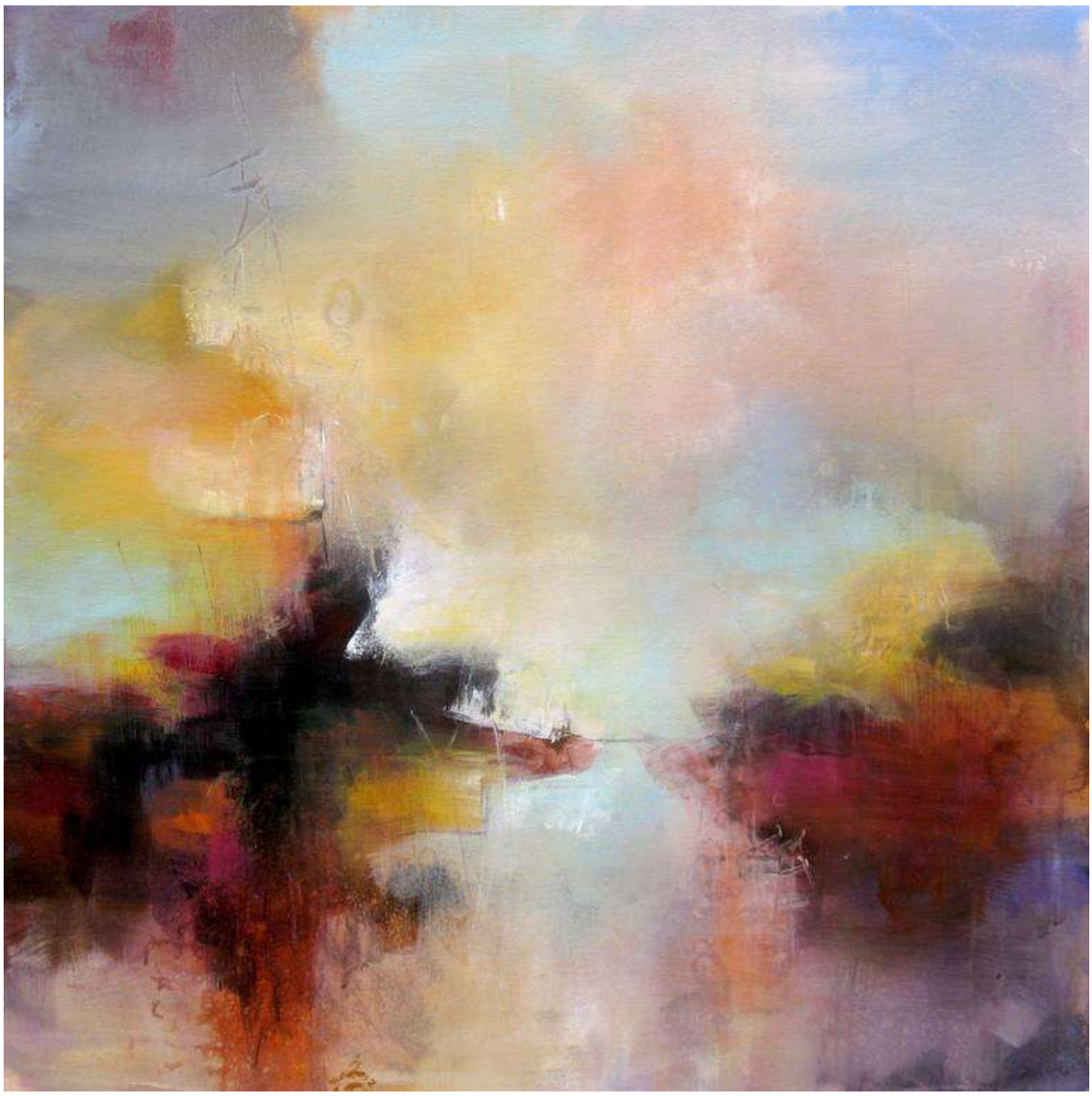
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 174

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

3461.「父殺し」を主題とする夢

3462. 25年以上前の夢と「父殺し」の夢について

3463. 日常=夢=旅

3464. 散歩から帰ってきて

3465. 土曜日の早朝より

3466. バイオ系のベンチャー企業を立ち上げる夢

3467. 今朝方の夢の続き

3468. 仮眠を終えて

3469. 右手に流れる不思議なエネルギーを感じる夢

3470. 空に浮かぶ美しいチューリップ畑とタランチュラと遭遇する夢

3471.「理解すること」の語源より

3472. 日曜日の終わりに

3473. ベートーヴェンと呼ばれる発狂する青年が現れる夢

3474. 流れることのない流れそのものとして

3475. 今朝方の夢の続き

3476. 作曲技術の引き出しの拡張に向けて

3477. 走らないマラソン大会に関する夢

3478. 二つの不思議な夢

3479. 久しぶりの太陽の光を浴びながら

3480. 世界一周の船旅をしながら

© YOHEI KATO 2018

3461.「父殺し」を主題とする夢

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を開始した。ここ数日は天気が悪かったが、今日は晴れるとのことであるから、昼食前に近所のスーパーに行き、午後からは散歩がてら街の中心部に行き、行きつけのチーズ屋に立ち寄ろうと思う。その他にも、いくつか消耗品が切れてしまっているので、それらを購入しに、街の中心部の雑貨屋に行こうと思う。明日からは三日間ほど天気が崩れるようなので、スーパーで食料を購入する際には、今日の分も含めて四日分購入する。そうすれば、明日からの三日間は買い物に出かける必要がなくなるだろう。

街灯の光が、まだ明けない闇の中に浮かび上がっているのが見える。今日は金曜日ということもあり、平日のためか、こうした闇の世界の中でも、通りを自転車で走る人や車の姿をちらほらと見かけることができる。日が昇るにはあと一時間半ほどの時間が必要だろう。

ここ最近は、本当に毎日何かしらの夢を見ている。しかもそれが、文章として書き留められるほどに鮮明な記憶として残っていることが不思議だ。確かに、先週末やさらにその前の週の週末に行った長時間にわたる座禅瞑想の実践直後の夜は、記憶に残る夢を見なかった。しかし、それらの日を除いては、ここ最近は印象的な夢を見ているように思う。

昨夜作曲した曲を就寝前に聞いていたところ、その曲はどこか甘い夢への誘いに思えた。そうした思いを携えて、その日の夢が甘美的なものであることを期待して就寝に向かった。すると、昨夜未明に自分でも笑ってしまうような夢を見た。それは甘美な夢とは程遠く、自己の攻撃性が極限まで凝縮した夢だった。それは、ギリシャ神話の「父殺し」を彷彿とさせるような夢であった。厳密には、その夢には母が登場していなかったこともあり、「エディプス・コンプレックス」を示唆するような内容ではなかったのだが、父を殴打して殺そうとする内容だった。

父と私がサッカーの練習場から一緒に帰っている最中に、私たちはその日の練習を振り返るような会話をしていた。とても和やかな会話だったのだが、会話の途中で何人かの友人や彼らの父親が会話を遮る形でその場に現れた。すると突然、父が先ほどまでは自分のことを褒めていたのに、それらの内容とはまるっきり反対の相矛盾することを友人の父親たちに笑顔で話し始めた。話の内容と父の態度に私は混乱していた。おそらくそれは、グレゴリー・ベイトソンが提唱した「ダブルバイン

ド(二重拘束)」として私に知覚されていた。ダブルバインドとは、親や権威のある者が二つの矛盾した命令を出すことによって、子供や命令の受け手が大きなストレスを抱えるコミュニケーションのあり方を指す。

どうやら私はそれを感じていたようであり、どうしたらいいのかわからなかったので、いっそのこと父を殺してしまおうと思った。実際にはそのような理性的な考えが生まれたのではなく、ダブルバインド状態に置かれた私は、何もためらうことなく、まずは後ろから思いっきりサッカーボールを父の頭にぶつけ、そのあとは父の顔や頭を中心に殴打し始めた。地面にうずくまった父を今度は、腹部を中心に蹴りを入れた。そのあたりで私はふと、このまま殴打を続けると、父は本当に死んでしまうかもしれないと思った。

そうした考えが一瞬よぎったのだが、サッカー場の近くにあった階段の上から下に父を転がしながら落としてみようと思った。階段の格段に頭がぶつかっていけば、瀕死状態になるだろうと予測していた。そうした予測が立った時には、父はすでに階段の下にうずくまり、虫の息をしていた。そこで夢から一度覚めた。

夢から覚めた私は、就寝前に期待していた穏やかな夢ではなかったことを笑った。しかしあまり笑えなかったのは、目覚める直前に、覚醒意識がその瞬間にあったにもかかわらず、丸められた布団の頭の部分を何度も殴打している自分がいたことである。

自己の暴力性を示唆するような夢を見て、実際に攻撃的なエネルギーを発散することは、治癒的な作用が無きにしも非ずだと思うのだが、そうした夢は、自分の夢で現れる数あるパターンのうちの一つになっている。それ以外にも、もしかしたら、そうした夢を単に自己の暴力性を示す夢だと括るのではなく、自己の他の側面が表れている可能性を模索した方が良いのではないか、という気づきを得た。そうした夢を見て、単に暴力的な夢だったと解釈して終わりにしていては、そうした夢を生み出す根本的な何かが治癒されることはないと気づき始めたのである。今後は、この夢のパターンについてはもう少し違った角度から捉えてみようと思う。フローニンゲン:2018/11/30(金)07:00

No.1451: Continuous Celebration

Saturday morning in Groningen is always quiet and peaceful.

I feel as if I were being embraced by continuous celebration. Groningen, 09:47, Saturday, 12/1/2018

3462. 25年以上前の夢と「父殺し」の夢について

早朝の七時を迎えた。思っていたほどに今日は寒くない。それよりもむしろ、室内の気温がかなり上がっているように感じたので、ヒーターを消し、窓を開けて新鮮な冷たい空気を入れることにした。早朝のこの時間から窓を開けることができるのは、来週の初旬までだと思う。そこからはおそらく、最高気温でさえもマイナスとなるような世界がやってくるだろう。

つい先ほど、一日分のコーヒーを入れ始めた。今、コーヒーメーカーが一生懸命働き、本日分のコーヒーを入れてくれている。コーヒーの香りが少しずつ部屋に広がっていく。

今朝方の夢について再度思い返している。ギリシャ神話を彷彿とさせる「父殺し」を主題とする夢について改めて振り返ってみると、神話というものが、やはり人間の深層意識の中で普遍的に現れる現象に基づいているのではないかと思わされる。興味深いのは、過去の様々な夢を再度思い返してみたときに、母を殺そうとするような夢は一度も見たことがないのだが、父を殴打する夢については何度も見たことがあるということである。さらに自分の幼少時代に記憶をさかのぼると、今でも覚えているが、小学校一年生ぐらいのときに、父に激しく叱られる夢を見て、それがあまりにも怖く、恐怖のあまりそこで起きて、寝室から母のいるリビングに向かって行った時のことを覚えている。

小学校一年生の時であったから、就寝時間は早く、その悪夢を見たのは夜の九時ごろであり、父はまだ仕事から帰ってきておらず、母はリビングでくつろいでいた。起床してきた私に対して、母は「どうしたの？」と尋ね、私はその悪夢について母に詳しく話すことはなかったが、「とても怖い夢を見た」とだけ伝えたのを覚えている。

今から25年以上も前の夢をふと思い出した。現実世界において、父と私の関係は極めて良好であり、とても仲が良いのだが、夢の世界では父と息子の間で非常に興味深いことが起こっている。「興味深い」とあえて述べたのは、夢の内容を精査していけば、確かにそこには父と私という二人の固有の人物が生み出す固有な関係性が夢に影響を与えていることが見て取れるが、より巨視的な観

点でいえば、ギリシャ神話の「父殺し」で象徴されているように、父と息子の関係性が持つ普遍的な構造特性を見て取ることもできるからである。

この点については、今度一時帰国した際にでも、父が祖父を殺そうとする夢を見たことがあるかどうかを尋ねてみたいと思う。仮に、そうした夢を見たことがあると父が述べれば、もしかすると、それ以降は父殺しの夢を見なくなるかもしれない。

思うに、父殺しの夢は普遍的なものでありながらも、そこに内包されるある種の病理的な関係性を乗り越えること、ないし治癒することが可能であり、それを実現させるためには、実際に父と息子の間で父殺しをテーマにした対話が必要だと思う。こうした対話を実際に行うのは一般的には難しいかもしれないが、私は父とであればそれが十分可能だと思う。今度一時帰国した際には、そうした対話を行ってみたいものである。だが実際には、釣りの話や詩の話、さらには最近父が始めたというハーモニカの話でもちきりかもしれない。フローニンゲン:2018/11/30(金)07:22

3463. 日常=夢=旅

私は人間発達を一つの探究領域として研究や実務を行っているが、究極的には人間発達を超えて、人間存在に関する探究を続けているのだと思う。そうした探究を継続していても、一向に人間存在がわからないというのが正直なところだ。自分という人間についてもまだまだわからないことだらけである。確かに、人間存在に関する探究を継続させていくことによって、徐々に自己の様々な側面や特質などが見えてきているのは確かだ。しかし、そうした明らかになっていく量をはるかに超える形で、未知な事柄が自分の内側に渦巻いていることを知る。

夢の分析にせよ、作曲にせよ、内的感覚をデッサンすることにせよ、はたまたこのように日記を書き留めることにせよ、今私は考えられるありとあらゆる手段を用いながら自己を知ろうとしているように思えてくる。それでも捉えがたい側面がある自己の存在には、圧倒されるものがある。

言葉になるものは言葉にし、言葉にならないものはそれが求める形にしていくということ。自己の内側に潜む無数の未知な事柄に対して圧倒されるのではなく、引き続きあらゆる方法で自己を深く知っていこうと思う。つい先ほどまで、「父殺し」を主題とする夢について書き留めていたが、その夢を見て一度目を覚まし、そこから再び就寝した後にも別の夢を見ていたことを思い出す。その夢の中で

は、私は瀬戸内海を彷彿とさせる砂浜にいた。砂浜をしばらく歩いていると、左手に工場が見えた。なんの工場だろうかと気になったので、工場の中を覗いてみようと思い、工場に近づいていった。

工場の中を見ると、いくらをパッケージに入れるような作業をしている人たちの姿を見かけた。ふと私は工場の中に入り、作業をしている人たちに話しかけてみた。すると、作業員の中に私の友人がいて、何をしているのかを尋ねてみた。何やら、それはいくらを商品として世に送り出すための作業ではなく、いくらの成分を研究しているのだという。興味深く思った私は、友人から色々と話を聞いた。すると友人が突然いくら以外のものを私に見せた。

友人:「これは三ヶ月前の生肉ね」

私:「三ヶ月？それもう腐ってない？変色してるよ」

友人:「そうかなぁ〜。まだ食べられると思うよ」

友人はそのように述べると、パッケージの中から生肉を取り出し、トレイの上に置き、匂いを嗅いだ。すると、どうやらやはりその肉は腐っているようだった。その時、夢の中の私は、「こうした肉でも美味しそうに食べる人間がいる」とふと思っていた。そうした考えが脳裏をよぎった瞬間に、夢の場面が変わっていた。

今度は、私はレストランの中にいて、注文を待っていた。厳密には、注文することを待っていた。すると、注文を聞きに来た男性がやってきて、見るとそれは、私の小中高時代の友人だった。偶然そこで友人と再会したことに驚き、注文すること忘れるぐらいに昔話に花が咲いた。

思い出話がひと段落したところで、いざ注文しようと思った時に、遠くの方から、皿が割れる音が聞こえてきた。見ると、ある一人の男性客が、床に皿を落としてしまったようだった。私は友人に注文は後でいいから、あの客の対応を優先するように述べた。友人は急いでその客のもとに駆け寄り、丁寧な対応をしていた。その様子を眺めていると夢から覚めた。

今朝はそのような夢を見ていた。昨夜就寝前に、夢を見るというのは、どこか旅に出かけるのと等しいのではないかとふと思った。その気づきを、枕元に置かれている裏紙にメモしていた。

© YOHEI KATO 2018

確かに、夢を見るというのは旅に出かけていくことと似ている側面が多々ある。夢の中にはとても印象的な世界が広がっていて、それは旅に出かけ、見知らぬ土地が印象的な世界に見えるのと非常に似ている。また、夢から喚起されるものも旅と似ているように思えてくる。大きな観点で見れば、夢も旅も、私たちに治癒と変容をもたらし得るものとして存在している。さらには、一つの夢が固有なものであるのと同様に、一つの旅も何ものにも代えがたい固有性を持つ。そのようなことを考えていると、どこか旅日記を綴ることと同様の価値を、夢日記が持っているように思えてくる。そして、実は何気ない日々を綴る日記の価値もそれらに劣るものでは決してないことがわかってくる。そうなれば、「日常、夢、旅の間には、何か境界線があるのだろうか？それらはすべて等しいものであり、等しく尊いものなのではないだろうか」という考えが浮かぶ。

日常、夢、旅が、一本の線で繋がれている。あるいは、それらが一つの全体に溶け出している姿を見て取ることができる。今日もこれから、日常という夢と旅の中で活動を続けていく。フローニンゲン：2018/11/30（金）07:48

3464. 散歩から帰ってきて

時刻は午後の五時半を迎えた。今日は午前中に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあった。その後、早朝に作っていた曲を完成させ、昼食前にスーパーに買い物に出かけた。

今日はもう少し晴れ間が顔を覗かせることを期待していたのだが、曇りがちな一日であった。昼食後、少しばかり作曲理論の学習を行い、仮眠を取ってから、散歩がてら街の中心部に買い物に出かけた。今日は二回外出したことになる。午後に散歩をしていると、今日はそれほど気温が低くないことを感じ、散歩も心地よかった。

もちろん、すでに冬用のジャケットを着ているのだが、マフラーや手袋はまだしなくて済むような気温である。時刻は三時半を迎えたあたりに、フローニンゲンの街のシンボルであるマルティニ塔の鐘の音が鳴り始めた。私は思わずその場で足を止め、しばし鐘の音に耳を傾けていた。

行きつけのチーズ屋に立ち寄り、散歩から帰ってくると、再び作曲理論の学習を開始した。今日は、調（キー）について学習を行っている。調とは、曲が持つ重力のようなものであって、調は力場と方向性を持つということを学んだ。また、調は一つ一つの音それぞれに個別の役割を与え、独自の世

界を作り出すという点も重要だろう。一つ一つの音にも個別の役割があるというのは人間と同じだ。一つ一つの音には固有の存在意義がある。

一つの音が鳴り響く際には、そこに固有の意味がある。そして、その一つの音が消え、別の音を呼ぶ込むプロセスを眺めていると、作曲家の武満徹が述べた「一音成仏」という考えを思い出す。

そういえば、本日の昼食前に、シューベルトがかけていた眼鏡についてふと思い出した。今から一年半ほど前にウィーンを訪れた際に、私はシューベルト記念館に足を運んだ。あれは、春の晴れた日だったと思う。記念館に足を運び、そこで私は、シューベルトが実際にかけていた眼鏡をじっと見つめていた。

その時に何を思い、何を考えていたのか定かではない。だが、若しくてこの世を去ったシューベルトがあれほどまでに多くの曲を創造したということ、そして魂と命を燃焼させて作曲に励んでいたことに感銘を受けていたのは確かである。春のウィーンの晴れたあの日に、記念館に足を運んだ時のことがふと思い出された。

今日は夕食後も作曲理論の学習を行っていく。今日は諸々の仕事もあり、午後には散歩もしていたから、作曲実践は早朝に行った一度だけになりそうだ。

今日学習した調について、とりわけ各調が持つ、エネルギー場の特徴に習熟したい。それが自分にとってどのように感じられるエネルギー場なのか、どのような色や匂い、はたまた形を持ったものなのかを掴み取っていく。ないし、そうした感覚を自分の内側で養っていく。そうした修練を積めば、自分が表現したいと思うエネルギー場を自由自在に作っていくことが可能になるだろう。

昼食前にスーパーに出かけた帰り道、作曲理論の重要さを改めて噛み締めていた。仮にこうした理論を学ぶことがなければ、自力である理論項目を見出していくことに数年かかってしまうことや、はたまた一生その理論項目に気づかないことも起こり得るということに思いを馳せていた。例えば、スケール上の六つ目の音と七つ目の音を半音上げて、七つ目の音を導音にするというメロディックマイナースケールというものが存在するということを学習しなければ、そうしたスケールが存在することなど一生知らないまま過ごすことになってしまうかもしれない。

一体どこの誰が、他の音ではなく、六つ目と七つ目の音を半音上げれば、メジャーとマイナーの両方の性質を持つ不思議な響きを奏でるスケールが生み出せると自力で考えつくだろうか。また、短三和音や長三和音という概念とその特徴に関する理論を学ばなければ、誰が長三和音の短調の曲の中で多く使えば、それが一般的な短調の響きが持つ暗さを和らげ、明るい感じの曲にすることができると考えつくだろうか。このようなことを考えることができるのも、2500年かけて構築された音楽理論の体系があるからだろう。今日も理論を学びながら、何度も「面白い！」と心の中で叫んでいた。

これまでの自分が全く知らなかったことを次々に学んでいくことがとても楽しく、何よりそれを自分の作曲実践の中で試行錯誤しながら適用していくことがなお一層面白い。明日と明後日は土日であるから、とことん作曲理論の学習をしていこうと思う。フローニンゲン：2018/11/30（金）17:54

3465. 土曜日の早朝より

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を開始した。今日は土曜日であるが、いつもと変わらない生活をしていく。端的には、自分のライフワークに従事していくということである。今日も探究活動と創造活動の双方に没頭するような日になるだろう。今は作曲理論を集中的に学ぶ時期であるから、他の領域の探究はほどほどにしたい。

作曲理論の学習を通じて得られたことを、即作曲実践の中に活用していく。早朝の習慣である、バッハの四声のコラールに範を求める実践においては、長調のいずれかの調を選び、その調が柔らかくなるかどうかを確認するために、Fm（エフマイナー）とDm-5（ディーマイナーディミニッシュ）を積極的に活用したい。また、曲が盛り上がる箇所には、Ab（エーフラット）とBb（ビーフラット）を活用してみる。こうした実験を早朝の作曲実践の際に行う。その後、本格的に今日の作曲理論の学習に入っていく。

昨日は、調と音階について学んだ。新しい項目に入る前に、昨日の復習をしておこう。また、作曲理論の学習の息抜きとして、昨日学習した調に関して、すべてのメジャーキーとマイナーキー（ハーモニックマイナーとメロディックマイナーを含む）の調号を確認しながら、実際にキーボードで音を何度も出してみようと思う。

今の私はまだ、どのキーにどれだけの数のフラットやシャープといった変化記号が付くのか覚えていない状況だ。こうしたことを頭で覚えていくのではなく、体で覚えていくことが大切だろう。そのために、MIDIキーボードで音を出しながら、実際に自分で一つ一つの調を体感していくことがカギを握ると思っている。そもそも、それぞれの調と調号を覚えていないと、今後の作曲実践の障害になることは間違いないため、とにかく今はそうした基礎的な事柄を身体を通じて学習していく。調号の付き方や変化記号の付き方にはパターンがあるから、それを掴むことができれば、調の習得はより速やかに行われていくだろう。

一昨日から始めた新たな習慣として、夕方にナッツ類を食べるときに、作曲ノートを読み返すということを行い始めた。昨日もそれを行っていたところ、これは非常に良い習慣に思えてきた。なぜなら、そうした短い時間の中でも、絶えず新たな発見があるからである。自分でまとめたノートの中には、自分なりの問いが書き留められていることがあり、その問いを改めて読み返すと、その場でその問いに答えることができたりするという発見があった。それらの問いは、まとめノートを作っている最中には回答できないものだったのだが、学習を進め、後日その問いに戻ってきた時にそうした問いに答えられるようになっていることには純粋に驚く。まさに、学習の小さな進歩を実感しているような感じだ。

今日はまず、使っているテキストの第四章に該当する、和音について学習を進めていこうと思う。本日も旺盛に作曲理論の学習を進めていく。それと並行して、今日は午後に時間を取り、ハーバード大学教育大学院への出願を完了させようと思う。フローニンゲン：2018/12/1（土）07:06

No.1452: A Waltz of the Everlasting Moon

Although I can't see the moon at all right now, I feel as if the everlasting moon were dancing a waltz. I expect to study composition theory tomorrow, too, and I'll compose a couple of pieces of music based on what I learned. Groningen, 20:40, Saturday, 12/1/2018

3466. バイオ系のベンチャー企業を立ち上げる夢

気がつけば、今日から12月に入っていた。今年も残すところ、あとひと月となる。

今年最後の月も、充実感に満ち溢れた形で進行していくだろう。そしてその流れは、来年へと受け継がれていく。そのようなことを思う。

起床して一時間ほど経ったが、今朝方の夢について少しばかり振り返っていた。ここのところは印象に残る夢をやたらと見ており、さらには、それらの夢を文章に書き留められるほど鮮明に覚えていることが不思議だ。もちろん夢日記というのは、書けば書くだけ、夢の想起力を高めてくれるのだが、それを差し引いても、ここ最近はほぼ毎日夢について書いているように思う。

ある時期においては、数日間ないし一週間ほど夢をパタリと見なくなることもあるのだが、それとは逆に、現在のように毎日連続して夢を見ることがある。こうしたサイクルについても観察をしていきたいと思う。そうしたサイクルを生み出している要因は何かについて意識を持ってみよう。

今朝方の夢の中で私は、旅館が併設されている学校にいた。その学校は、実際に通っていた中学校のように思えた。なぜなら、中学校時代の友人がそこにたくさんいたからである。どうやら私たちは、学校の横にある旅館のような施設に宿泊をしているようであり、それは合宿のようであった。男女合わせて五人ぐらいの友人と私は、ある教室の中にいた。

一人の友人が、ある生物の中に特殊な遺伝子を発見し、それを人工的に複製できることを実現させた。その発見をした友人を含め、私たちは教室で彼の話を聞いていた。その友人は、決して学校の成績は良くなかったため、私たちは彼の発見に驚いていた。その場にいた私たちは全員、実際の中学生ぐらいの身体であり、心も大して成熟していないようだった。

特殊な遺伝子を発見した友人の話を聞いた後、彼は教室からいなくなり、教室に残った者たちで彼の発見について引き続き話をしていた。すると私はとっさに、「バイオ系のベンチャー企業を立ち上げよう」とみんなに持ちかけた。彼の発見は非常に意味のあるものであり、その発見に基づいて社会にサービスを提供していくことが可能だと私は思った。そこにいた他の友人は身を乗り出して私の話を聞いていた。

私たちは、数ある会社形態の中でも株式会社を設立することを念頭に置いており、誰を代表取締役にするかが悩ましい問題として浮上した。教室から去っていった友人がその遺伝子を発見したこ

© YOHEI KATO 2018

とは間違いないため、彼を代表取締役にするというのは自然と言えば自然かもしれないが、彼は企業を引っ張っていくようなリーダーでは決してない。

そこからしばらく私たちは、誰を代表取締役にするかを話し合っていた。その議論の最中に、仮に株式会社を設立したら、実際に事業が始まるとすぐに上場を果たすような予感がしており、それが実現されると、設立者である私たちの元には大量の資金が流れ込んでくることが予想された。その時に、遺伝子を発見した彼は少なくとも10億円ほどのカネを受け取ることになると思い、彼がそのような金額のカネを受け取っていいものかを私は考えていた。中学生であるということを除いても、その他にも、彼はそうした大金を持ってはならないような性質を持っているように思えてきたのである。

そうしたことから私は、少しばかり謀略のように思えるが、彼を会社の代表取締役にすることはおろか、役員にもしないほうがいいと考え、それをみんなに伝えた。その考えに対して、全員も賛成のようであったので、私たちは彼に気付かれない形でベンチャー企業を立ち上げた。しかし後日、どのような経路で彼に知られたのかわからないが、彼は会社設立のメンバーに入れないことを知り、設立メンバーだけで行っていたミーティング中の教室に憤慨しながら入ってきた。そもそも彼を会社には一切関与させないと持ちかけたのは私であるから、私はその場をなんとか収めようとした。

私はカバンから、おやつと500円玉を取り出し、それを彼に渡した。すると、つい先ほどまで激怒していた彼は、「えっ、いいの？」という表情を浮かべていた。

「その代わり、発見した遺伝子に基づいて僕らだけで会社を立ち上げてもいい？」と聞くと、「うん、いいよ」と彼は笑顔で答えた。彼はおやつと500円玉を握りしめたまま、嬉しそうに教室を後にした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2018/12/1（土）07:37

No.1453: A Spirit Before Dawn

It’s 8:30 AM now, and finally it has become light. Yet, today will be cloudy and rainy all day long. I’ll devote myself to studying composition theory, today too. Groningen, 08:40, Sunday, 12/2/2018

3467. 今朝方の夢の続き

天気予報に基づくと、今朝はもう少し暖かいと思っていたのだが、体感上は少々寒さを感じる。少しばかりヒーターの温度を上げ、これから早朝の活動を本格的に始めたいと思う。

今日は土曜日ということもあってか、辺りはとても静かだ。時刻はもう間も無く午前八時を迎えるが、辺りはまだ闇に包まれている。遠くの空がようやくダークブルーに変わり始めた。

今日から三日間は雨の日が続く。特に、今日と明日は比較的雨量が多いらしい。昨日に、すでに四日分の食料を購入しているため、ここから三日間は買い物に出かける必要もない。その分、探究活動と創造活動に打ち込むことができるだろう。

今朝方の夢について先ほど書き留めた後にコーヒーを作っていると、あの夢についてもう少し補足的な事柄を思い出した。立ち上げを目指していたベンチャー企業の代表取締役を誰にするかについてであるが、他のメンバーは私が代表取締役になるのがいいのではと言う。私はそうした役職につくことに一切関心がなく、むしろそうした役割は自分には務まらないと思っていたため、彼らの提案にはあまり乗り気がしなかった。そのため、彼らの中から私が適任だと思う友人をなんとか説得し、彼に代表取締役になってもらうようにお願いをしていた。

そのような場面があったことを思い出す。さらに続けて別の夢を見ていたこともふと思い出した。その夢は、一つ前の夢とつながっており、風景に関しては同じだった。ただし、私は学校の中にいたのではなく、学校に併設されている旅館の一室にいた。それは日本的な旅館というよりも、アメリカ風のモーテルと呼ぶにふさわしい建物であった。

私は目を開けたままベッドの上に仰向けで寝ていた。天井を見ながら、ぼんやりと考え事をしていた。すると、部屋をノックする音が聞こえたので、部屋に入っても問題ないとノックした人物に伝えると、一人の友人が部屋に入ってきた。なにやら、今からどこかに移動しなくてはならず、早急に荷物をまとめる必要があるとのことであった。その彼もまだ荷物をまとめていないらしく、私の部屋で荷物の整理を始めた。私は一切荷物の整理をしてなかったため、そこから荷物をまとめ始めると少々時間がかかると思った。

すると、またしても部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。ドアを開けると、そこには別の友人が立っており、「もう迎えが来た」と彼は述べた。外には少々いかつい黒い車が止まっていた。その友人曰く、ある企業のアメリカ人の代表がその車に乗っており、私たちを直々に迎えに来てくれたのだという。もう少し待って欲しいと彼に述べ、私は再び自分の荷物をまとめ始めた。

すると、もう一人の友人は荷物を先にまとめたらしく、車の運転手にもう五分待って欲しいと伝えてもらうように私は彼にお願いした。「五分は長いよ。三分ね」と彼は述べ、部屋から出て行った。正直なところ、あと三分で荷物をまとめることなど不可能に思えた。なぜだか私は、とりあえずシャツを着て、スーツを羽織り、忘れ物があったとしても構わないので、急いで荷物を詰めて外に出ようとした。しかし、やはり置き忘れたものがあると困ると思い、念入りに部屋を確認しようと思った。そうすると、三分どころかもっと時間がかかると思ったので、私はもう迎えの車に乗ることを諦めた。そこで目が覚めた。フローニンゲン：2018/12/1（土）08:00

3468. 仮眠を終えて

つい先ほど仮眠を取り終えた。仮眠の最中、心象イメージとしてピアノの鍵盤が脳内に現れ、諸々のキーの音を試行錯誤しながら奏でていた。ちょうど仮眠の前に、フラットの調号が付いたキーをMIDIキーボードを用いて繰り返し弾いていた。それが影響をして、仮眠中のサトル意識の状態の中でも鍵盤を弾くことにつながったのだろう。こうした内的ビジョンが立ち現れるほどに、今日も午前中は作曲理論の学習をしていた。早朝の作曲実践を終えてからは、午前中はほぼすべての時間を作曲理論の学習に充てていた。

特に和音について学習し、様々なタイプの和音のみならず、ダイアトニックコードの様々なコードを学習していた。まとめノートを取りながら、時にキーボードで音を出しながら学習を進めていたため、内容としてはテキストの一章分しか読み進めることができなかったが、そのような速度で全く問題ないと思う。今使っているテキストは二読目であるから、一つ一つの項目を理解しながら丁寧に読み進めていけばいい。

つい先ほど小雨が降り始めたが、今はまた雨が止んでいる。天気予報を見る限りでは、もう少し雨が降るかと思っていたのだが、どうやら夕方から雨が本格的に降り始めるらしい。今日の午前中の

雰囲気を思い出すと、とりわけ静かで穏やかであった。フローニンゲンの土曜日の朝を象徴するような世界がそこに広がっていた。

自分がどこか果てしなく続く祝祭に包まれて生きているかのように感じていた。そうした感覚を味わうことができているというのは、日々が充実感と幸福感に包まれているということだろう。

今日はこれから、いよいよハーバード大学教育大学院への出願を済ませたいと思う。提出期限まではあと一ヶ月ほどあるのだが、すでに必要書類は全て揃っており、ここから年始にかけては少々協働プロジェクトの仕事が立て込む可能性があるため、今日の夕方までに提出を完了させたい。そのためには、まずは自分の経歴が記載されているCVを最終版にしていく。半年前のものから大してアップデートする必要はないのだが、もう一度誤字脱字がないか、記入漏れなどがないかを確認していく。

CVを最終版にしたら、今度はもう一度、志望動機書を最初から最後まで読み返し、最終版にする。それが終われば、提出書類については全て最終版になったことを意味する。あとはそれらをオンラインアプリケーション上にアップロードし、オンライン上で記載するその他の項目についても、再度誤字脱字、記入漏れなどがないかを確認していく。そこまで完了すれば、最後に出願料の支払いをすれば終わりとなる。結果については、三月の中旬あたりにわかるそうである。どのような結果になったとしても、今後も今と変わらず、探究活動と創造活動に専心する日々が続いていくだろう。フローニンゲン：2018/12/1（土）14:53

3469. 右手に流れる不思議なエネルギーを感じる夢

今朝は五時に起床し、五時半から一日の活動を始めた。辺りは静寂に包まれている。今、一台の車が通りを走り去っていく音が聞こえた。日曜日のこの時間帯には珍しいことである。

今日は一日中雨のようだが、今はまだ雨が降っていない。昼食後と夕食後の時間帯を除いては、今日は雨が降り続けるようだ。

数日前の日記で言及したように、ここ最近はほぼ毎日印象的な夢を見ている。今朝方もとても印象的な夢を見ていた。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校の教室の中にいた。そこは音楽室のようであり、私は一人の友人と会話をしていた。なにやら、彼は音楽に関して研究をしているらしく、データ解析の手法に関して私に助言を求めてきた。まずデータの種類を確認すると、彼は音の高低に関する時系列データを収集していたようだった。

ちょうど音楽室にはホワイトボードがあったので、私は縦軸に音の高低を取り、横軸に時間を取った。データを座標平面にプロットしてみると、なにやらトレンドがそこに見出せる。

私:「ちょっと回帰直線を描いてみよう」

友人:「回帰直線？」

私:「うん、二変数の分布傾向を示すものさ」

私はそのように述べ、さっと回帰直線を描いた。すると、その二変数の間にはやはりトレンドがあるらしかった。そこからより高度な分析手法を適用しようと思った瞬間に、友人と私は音楽室ではなく、普通の教室にいた。友人と先ほどの続きについて話しをしようと思ったら、前職時代の上司が教室に入ってきて、黒板を指で軽くなぞった。その指にはチョークの粉が付いている。

上司:「まだ汚いぞ」

上司がそのように述べると、小綺麗なスーツを着た小さなオランダ人が教室に入ってきて、彼も黒板を指でなぞると、コクリと小さくうなづいた。

友人:「すいません、今から綺麗にします」

友人はそのように述べ、すでに掃除をしたと思われる黒板を、また綺麗にし始めた。右から左へと黒板消しを移動させていく友人の背中を見ていると、私も手伝おうという気になった。私も右から左へと黒板消しを移動させていくと、友人が別の友人に入れ変わっていることに気づいた。彼は私の後を追いかけるように黒板消しを移動させていく。だが、彼の黒板消しはそもそも汚れているらしく、

教室の後ろの方から、何人かの友人がそれを指摘している。すると彼は苦笑いを浮かべながらも、最後まで私と一緒に黒板を消した。

黒板を消し終わると、とても暑くなり、私は上着を脱ぎ、上半身裸になった。「暑いなぁ」と私がぼやいていると、一人の大柄な男性が部屋に入ってきた。どうやらその男性は教師らしいのだが、私は見覚えがない。その教師が部屋に入ってきたところで、授業が始まった。授業が始まったのはいいものの、生徒はみんな着席することなく、全員その場に立っていた。

どうやら椅子も机も使わずに授業をするようだった。その教師は、教室の前列に立っていたある友人に、「元気か？」と笑顔で肩を軽く叩きながら声をかけた。そして、その友人と肩を組み始めた。その友人の身長は178cmぐらいなのだが、見ると、その友人が小さく見えてしまうほど、その教師は背が高かった。私も彼らの近くにいたので、巻き添いを食ってしまい、教師と肩を組むことになった。すると突然、教師は私の手を指差して叫んだ。

教師:「世界はその手にかかっている！！」

私:「えっ？」

教師:「世界はその手にかかってるんだ！！」

私:「みんなの右手に？」

教師:「違う！お前の右手にかかってるんだ！！」

私のみならず、その場にいた他の生徒全員も唖然としている。私は何のことかよくわからなかったが、教師が私の右手を指差してそのように叫ぶと、突然右手の手のひらが暖かくなり始めた。それは自分の手のひらの内側に流れる血の流れだけでは説明がつかず、自分の右手の手のひらに流れるエネルギーのようなものに思えた。自分の右手の手のひらを左手の中央の指三本でゆっくりさすりながら、私はそのエネルギーを感じていた。

© YOHEI KATO 2018

顔を上げると、教師はもう教室におらず、生徒だけが教室にいて、見ると、教室中には机と椅子が置かれていた。私は自分の右手に流れる不思議なエネルギーを感じながら、教室の右列にある自分の席に腰掛けた。私の後ろには、幼馴染の女性の友達がいて、彼女が私に声をかけてきた。教室にいた全員が、私が不思議な力を持っていることを自覚したようであり、かといって私を避けるわけではなく、むしろ気を遣っているような雰囲気が教室中に漂っていた。

彼女が話題を変えて、音楽に関する話をし始めた。左隣にいた親友も話に加わってきたのだが、彼の眼鏡が汚れていることに私は気づいた。

私:「眼鏡が汚れているから拭いてあげるよ」

親友:「えっ？いや、いいよ。自分で拭くよ」

彼は私に気を遣っていることがわかった。自分で眼鏡を拭いている彼を横目に、後ろの席にいる女性の友達と再び会話を続けた。話を聞くと、彼女はピアノの演奏ができるらしく、私はそれを知らなかったので、少し驚いた。しばらく会話をした後、私が立ち上がると、彼女は私の左足の膝小僧あたりを触り、筋肉と乾燥具合を確認した。

私は無言でその場を離れ、教室を後にした。教室の廊下を歩きながら、「確かに左足の膝小僧は少し乾燥しているみたいだな」と私は思った。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/2(日)06:08

No.1454: A Bucolic Explosion

Sunday now is approaching the end, inviting a new week. It was fortunate for me to spend a wonderful time this weekend. Groningen, 20:04, Sunday, 12/2/2018

3470. 空に浮かぶ美しいチューリップ畑とタランチュラと遭遇する夢

起床から一時間が経ち、時刻は午前六時を迎えた。書斎の窓の外を眺めると、一時間前となんら変わらぬ光景がそこに広がっている。あるのは闇と、闇の中に浮かぶ街灯の光だけである。風も一

切吹いておらず、辺りが静止画のようにピタリと止まっているかのように見える。それは物理的な次元のみならず、どこか時間さえもがピタリと止まってしまっているかのようだ。

先ほどまで今朝方の夢について書き留めていた。色々気になる箇所はあるのだが、やはり印象に残っているのは、教室に入ってきた教師が私に述べた、「世界はお前の右手にかかっている」という言葉である。それを聞いた時、「そんな馬鹿な」と私は思った。何を大げさなことを言っているのかと、その教師に対して思ったが、夢の中で確かに自分の右手に流れる不思議なエネルギーを感じていたことは確かだ。あれは一体何だったのだろうか。

夢の中の身体は、通常サトルボディと呼ばれる概念で説明することができる。それは微細なエネルギーの集合体であり、そうした微細な身体に流れるもう一段微細なエネルギーを自分は感じていたようだった。また興味深いのは、黒板を消し終えた後に、私は暑さのあまり上半身裸になり、その後はもう一度服を着たのだが、その夢が場面を変える瞬間に一度深夜三時に目を覚まし、自分が寝汗をかいていることに気づいた。

夢の中の身体と現実世界の身体のつながりをここで見ることができる。ゆえに、プロセスワークの創始者であるアーノルド・ミンデルが述べるように、夢の中の身体を治癒すると、それは物理的現実世界の身体の治癒につながるということは納得ができる。実際のところは、サトルボディよりもさらに微細な身体であるコーザルボディや、そこからさらに微細な身体である非二元的身体などがあるため、このあたりの話は探求の余地がありそうである。

そういえば、あの夢の後にも、もう一つ短いのだが、極めて印象的な夢を見ていたことを思い出した。私は誰もいない一軒家の二階の部屋の中にいた。閉められた窓の外を見ると、晴れのようなのだが、外の世界には誰もいないように思われた。一度窓から視線をそらし、再び部屋に視線をやると、窓の外の景色が変わったように思えた。

再度窓の外を見ると、なんとそこには満開のチューリップが空一面に浮かんでいた。数多くのチューリップが一つの束となり、そうした束が無数に空を埋め尽くすように浮かんでいたのである。「空を埋め尽くす」という表現をより厳密に述べると、チューリップが無造作に空全体に散らばっていたのではなく、はたまた空全体に一切の隙間がないように埋め尽くしていたのでもなく、私の部屋の窓の

外から始まって、チューリップの束の上を歩くことができるような具合にチューリップが空の上に浮かんでいたのである。私はその光景に見とれてしまい、しばらく空の上に浮かぶチューリップ畑を眺めていた。よくよく観察してみると、あるチューリップの束の中に、一匹の小さなハチがいることに気づいた。

相変わらず外には人がいる気配はせず、またそのハチ以外にはもう他のハチはいないようであった。そこからしばらく私はチューリップ畑の美しさに恍惚としながらそれを眺めていた。気の済むまで空に浮かぶチューリップ畑を見たところで、再び部屋の方に視線をやった瞬間に、窓の外に二枚の白いワイシャツがかかっていることに気づいた。「いつからここに干していたのだろうか？」と私は不思議に思った。

どうやら、その二枚のワイシャツは数日前から外に干されていたらしい。そのワイシャツを部屋に取り込むために、窓を開けると、ワイシャツを干すために釣竿代わりに使っていた細い板の上にタランチュラのような巨大な黒いクモがいることに気づいた。私はそれを見たときに、ギョッとした。それはタランチュラ以上に巨大であり、黒々とした体がとても不気味であった。

私は板の上からタランチュラを落とそうとした。しかしタランチュラは、一向に板から落ちる様子を見せず、むしろこちらにゆっくりと近づいてきた。なんとかタランチュラを振り落とすために、板を窓枠に擦り付けるようにすると、タランチュラは板の先端まで落ちていき、あと少しで板から落ちそうになった。すると突然、その巨大なタランチュラが巨大な黒いクマに変わった。

クモからクマに変わったことに私は驚いたが、もうなりふり構わず、板を左右に大きく揺さぶり、クマを二階の高さから地面に落とした。その瞬間、今自分がいる場所は確かに二階なのだが、それは建物の構造上13階に匹敵する高さであるから、地面に振り落とされたクマは死んだだろうと思った。死んでいないとしても、瀕死の状態以上であることは間違い無いだろうと思った。クマが落ちた先は、自宅の庭なのだが、瀕死のクマ、ないし死んだクマをどうしようかと考えていたところで夢から覚めた。
フローニンゲン：2018/12/2（日）06:35

No.1455: A Morning Soft Feather

Although the outside temperature is low and the sky is covered with clouds, I have a feeling that I want to fly with soft feathers. I'll engage in my lifework today, too, fully relaxing myself at every moment. Groningen, 08:29, Monday, 12/3/2018

3471.「理解すること」の語源より

早いもので、日曜日も昼食どきを迎えた。午前中から小雨が降り始め、今も微細な雨が降っている。それが窓ガラスに付着している様子を見ることができる。

今日も早朝から、作曲理論の学習を進めていた。ようやく、コード進行に関する章を再読し終えた。まとめノートを作りながら、確実に一つ一つの項目を理解しながら読み進めているので、いくら時間がかかっても問題ない。着実に学習が進み、作曲理論に対する理解が着実に深まっているのを実感する。

今、「理解」という言葉を用いたが、その日本語に対応する最も一般的に使われる英単語としては“understand”という単語を挙げることができるだろう。その語源を調べてみたところ、それはラテン語の“intelligere”を語源に持ち、「間を結ぶ」という意味があることを知った。何かを理解するということは、間をつなげていく、ないしは埋めていくことなのだということを知る。

作曲理論の一つ一つの項目を理解していくことによって、自分の中の音楽空間が徐々に密なものになっていくように感じているのは、もしかすると語源通りの現象が感覚的にも起こっているからなのかもしれない。午前中の学習を振り返ると、日々の作曲実践の中で自分が無意識的に行っていたことが、ことごとく理論で説明できることに驚く。

早朝の習慣として、バッハのコラールを参考にして作曲をしているのだが、その際には小節の冒頭（強拍）ではなく、それ以外の弱拍の部分で曲を終えることが多い。それは「女性終止」と呼ばれるものだということを本日学んだ。テキストを読み進めると、ベートーヴェンは男性的リズムを好み、ドビュッシーは女性的リズムを好んでいたことが書かれていた。今後は、そうした観点を持って彼らの曲を眺めてみようと思う。

午後からも引き続き作曲理論の学習をしていく。午後からは、続きの章として、「コードスケール」を読み進めていく。理論の学習をしばらく進めていったところで、休憩がてら、今日は久しぶりに、ベートーヴェンに範を求めて作曲をしてみようと思う。ここのところは、ベートーヴェンのみならず、バルトークからも離れており、彼の『ミクロコスモス』に収められている短い曲は、今学んでいる理論項目を適用するのにうってつけかもしれないと思った。近々、バルトークの『ミクロコスモス』にも再度範を求めようと思う。

先ほどふと、音楽とトランスパーソナル心理学を組み合わせた研究を近い将来に始めたいと思った。それは今すぐにではなくてもいい。むしろ、もう少し諸々のことが深まり、諸々のことが落ち着いてから始めるような研究テーマである。具体的にどのようなことを研究していくかは今のところ未知である。だが、そうした二つの異なる領域を架橋するような研究にふと関心が向かったことをここに書き留めておく。これから昼食を摂り、メールの返信などを済ませてから仮眠をし、午後からも作曲理論の学習に励んでいきたい。フローニンゲン:2018/12/2(日)12:09

3472. 日曜日の終わりに

時刻は午後の八時半を迎えた。先ほどまで降っていた小雨が止み、今は静かな夜の世界が広がっている。日曜日が終わりに向かい、新たな週を呼んでいる。今週末もとても充実した日々を過ごすことができたことは何よりである。昨日に引き続き、今日も作曲理論の学習を旺盛に進めていた。昼食後に、少しばかり協働プロジェクトに関する仕事に従事していたが、それ以外の全ての時間は、基本的に作曲理論の学習に時間を充てていた。

今日はもう少し時間があるので、就寝までの時間を再度作曲理論の学習に充てたい。日々の学習を眺めてみると、今は本当に熱を入れて作曲理論の学習に取り組んでいるように思う。

作曲理論の学習も発達理論の学習と同様に、終わりなど存在しないように思える。発達理論を学べば学ぶほど、その奥深さに触れ、今もなお探究を継続しているように、作曲理論に関しても、学べば学ぶほどその奥深さを知るだろう。発達理論と作曲理論は、一生涯付き合っていく重要な領域となった。

今日は午後に仮眠を取った後に、ヨガの実践を少々行った。時間にしてほんの数分だが、起床直後だけではなく、これからは仮眠を取り終えた後にもヨガを行おうと思う。とりわけここ最近は週に二、三回ほど近所のスーパーに行くか、街の中心部の行きつけのチーズ屋に週に一度行くだけであるから、自宅で行える身体実践の量を少し増やそうと思う。

これまでは起床直後と就寝前に少々ヨガの実践を行うことが習慣であったが、これからは仮眠後の午後にも一度ヨガを行うようにする。身体の調子は、探究活動と創造活動に強く影響を与えるため、常に最善の身体状態を作り出すようにする。

もう三十分ほど作曲理論の学習を進めていくが、その際にはコードスケールの続きを読んでいく。ちょうど今は教会旋法の様々な種類を学習している。数は多いが、その分類には規則性があるため、それを抑えて、覚えるべきことはきちんと覚えたい。 その際にも、実際に手を動かし、キーボードを叩きながら、身体を通じて覚えていくことが大切だ。

現在テキストの二読目を進めており、全ての章に対してまとめノートを一旦作ったら、テキストの三読目に入るのではなく、まとめノートを何度か読み返すことを行う。そこでは、四回から五回ほど連続してノートを読み返す。諸々の項目を理解しながら覚えていくことは非常に楽しく、それを作曲理論に応用することはなお一層喜びが強い。明日からの新たな週においても、作曲理論の学習に集中していこうと思う。フローニンゲン:2018/12/2(日)20:37

3473. ベートーヴェンと呼ばれる発狂する青年が現れる夢

昨日同様に、今朝も五時に起床した。起床直後に行うヨガの実践を終え、五時半から一日の活動を始めた。今日から新たな週が始まる。曜日の感覚や週に対する感覚が一度溶解し、毎日が等しく尊い価値を有しているように思えてくる。そして、どの曜日も変わらずに自分の取り組みに従事し、至福さと充実感の溢れる日々を送ることができている。

今日も自分の人生のある一日なのだから、それが至福さと充実感に溢れない日になるわけがない。今日も意義深い一日になるだろう。

連日、何かしらの夢を見ている。確かに、今朝方の夢の記憶はそれほど強いものではないが、覚えている限りのことを書き留めておく。書き始めると何かを思い出すこともあるだろうし、何よりも、書けば書くだけ夢の想起力が高まっていくだろう。

今朝方の夢の中で私は、セミナールームのような場所にいた。外見上、そこはビルの中のセミナールームなのだが、実際には高校の授業か何かが行われていた。生徒全員が着席しており、何かの授業を受けている。私は生徒の一人というよりも、オブザーバーとしてそこにいるようだった。

授業が始まってしばらくすると、教室の最後列の男子生徒が突然立ち上がり、何かを叫び始めた。私はその生徒が発狂してしまったのかと一瞬思った。

教師:「ベートーヴェン、どうした？」

ベートーヴェンと呼ばれる生徒:「XXXX, XXXXXXXXXXXXXXXXXX, XXXXXX!!」

私はまず、その生徒がベートーヴェンと呼ばれていることに驚いた。よくよく見てみると、彼はベートーヴェンの青年期に顔立ちが似ていなくもない。ベートーヴェンと呼ばれる生徒は、日本語が話せないようであり、ドイツ語で何かを叫んでいた。それは意味のある叫びというよりも、発狂した者が上げる雄叫びのように私には聞こえた。

彼の目を見ると、視線の先は教師ではなく、どこか視点が定まっていないように思えた。強いて述べるとするならば、彼はこの部屋の向こう側に広がる宇宙を見ているような感じであった。相変わらず理解不能なドイツ語を話し続けるベートーヴェンと呼ばれる生徒の言葉をよくよく追ってみると、どうやら音楽的にとても重要なことを彼が述べていることがわかった。

叫びは徐々に小さくなり、つぶやくように彼は何かを話し続けている。もはやそれは、人間と交信しているというよりも、人間を超越した存在と交信しているかのようであった。

今朝方はそのような夢を見ていた。その夢の中では、私は間違いなく夢の観察者であった。夢の中の登場人物の一人というよりも、それを絶えず観察し、夢には何ら干渉しないような存在としてそこ

© YOHEI KATO 2018

にいた。この点は興味深い。なぜなら、昨日は夢の中の登場人物として、夢のストーリーそのものと同一化していたからである。一方、今朝方の夢では、自分の置かれている役割が違った。

夢と一括りにしても、その中で自分が夢そのものに関与する形でそこに存在しているのか、はたまた一切関与することなしに、夢を観察する者としてそこにいるのかの違いがあるように思える。ここからがさらに重要なのだが、夢を観察する者としてそこにいる自分を明瞭な意識を持って観察が出来始めたら、それはドリームヨガの完成だろう。つまり、夢の中ですら自覚的な意識を保つということである。それが実現されるのは随分と先のことであろうが、確かにその道を少しずつ歩いているように思える。次回以降、夢を振り返る際には、その夢の中での自己の立ち位置についても書き留めておこうと思う。フローニンゲン:2018/12/3(月)05:58

No.1456: The Glass-Like World

This reality might be more fragile than we think. However, the foundation itself could be unchangeable and robust. Groningen, 20:05, Monday, 12/3/2018

3474. 流れることのない流れそのものとして

今朝方起床してすぐに歯磨きをしている最中に、今日も自分の人生が新たに始まったことに対して不思議に思った。

オーストリアの詩人リルケは、何かを成し遂げていくためには、永遠に生きられるつもりで生きていく必要があると述べていたことを思い出す。しかし、私はそうした態度に少し違和感を覚えている。この違和感はどこからくるものなのだろうか。人は物理的に永遠に生きることはできないが、精神的には永遠に生き続けることができる。言い換えると、身体も心も消滅したとしても、魂的には永遠に生きることがそもそも可能なのだ。さらに述べると、それは可能というよりも人間の存在における所与の事実のようなものである。

「永遠に生きられるつもりで」という言葉に引っかかるものを感じたのは、魂の永続性が考慮に入れられていないように思えたからかもしれない。いずれにせよ、今日も自分の人生のある一日が始まったことには変わりない。それそのものが純粋に不思議である。

このところ、「自分が誰かわからなくなる」ということをようやく超えて、「自己とはそもそも自分にもわからないものである」という発想が芽生え、日常生活の中で、突然自分が消えたような感覚になっても何ら驚かなくなった。以前であれば、そこには驚きと、多少の不安、ないし恐怖感のようなものが混じっていたように思う。だが今は、そうした感情はほぼ皆無のようである。

今朝方の感覚をもう少し正確に述べるなら、「ある一人の人間の人生のある一日が再び始まった」というものになるだろうか。私はどうやら、「ある一人の人間」の人生を生きているようである。

夢を見ない深い意識状態の中で、自覚的な自己はいないのだが、そうした状態における自己も自分であると見なせば、自己の存在範囲は一気に拡張する。どこまで拡張するかというと、このリアリティの細部及び全体にまで拡張する。拡張しないはずはない。ここで、自己という存在が即リアリティの全てと同一のものであることがわかる。これは大変興味深い気づきである。

「ここからここまでが自分」という境界線が完全に取り払われ、自分は全てであることがわかる。全体との一体感がそこにある。それは乳幼児が知覚している世界との未分化の一体感ではなく、分化が極限まで推し進められた先にある統合的な一体感である。起床直後に感じていたのは、そのような一体感であった。

時刻は午前六時を回った。今は雨が降っていないが、今日も断続的に雨が降るらしい。今日も一日中家の中で過ごし、自分のライフワークに邁進していくことになるだろう。本当に毎日、私は自分のライフワークにしか従事していない。ライフワークと呼べないようなものには一切従事していない。ライフワークだけに従事して毎日を過ごす生活が実現されたことを嬉しく思う。そして、それに対する感謝の念は途絶えることがない。

暗闇に包まれた通りを一台の自動車が通り過ぎていった。あの自動車のように、今日も時間があっという間に過ぎていくかもしれない。そうであったとしても、あの自動車と自分がここにあったということには変わりなく、人生はあの自動車のように流れていくものであり、同時に流れることのない流れそのものとして永続していくものなのだろう。フローニンゲン：2018/12/3（月）06:17

No.1457: Facial Expressions of the Weather

As the weather forecast said, it stopped drizzling. Now it is fine. Because the weather had not been so good recently, I appreciate today's beautiful weather. I can feel that my energy is vivacious. Groningen, 11:23, Tuesday, 12/4/2018

3475. 今朝方の夢の続き

つい今しがた、一日分のコーヒーを入れ始めた。コーヒーメーカーが今音を上げながら、せっせとコーヒーを作っている。

午前六時を過ぎたばかりのこの時間帯は、とても静かであり、外の世界の音は何も聞こえてこない。強いてあげるとするならば、通りを走り去っていく車の音がかすかに聞こえてくるぐらいだろうか。

これまでの私は、ある作曲家の一つのアルバムを毎日何度も繰り返して聴き続け、それが数日続いた後に他の作曲家のアルバムに移るような形で音楽を聴いていた。一方、ここ最近は、毎日違う作曲家の曲を聴くのみならず、アルバムが最初から最後まで終わったら、そこで別のアルバムに移っていくような形で曲を聴いている。自分がSpotifyにダウンロードしている全ての曲を、ここでもう一度全部聴いてみようという意思が働いているのだろう。

今日は、八時間に及ぶ、シューベルトのピアノソナタを聴こうと思う。偶然にも先日、昨年の春にウィーンのシューベルト記念館を訪れた時の記憶を思い出していたため、本日シューベルトの曲を聴くというのは何かしらの意味があるのかもしれない。

一日の活動を本格的に始めようとしたところ、今朝方の夢の続きについて思い出していた。すると、早朝に書き留めておいた夢の中では、観察者としての自分がそこにいたのに対し、続きの夢の中では、夢の登場人物として自分がいたことに気づいた。

夢の中で私は、ある総合病院のロビーにいた。そこには、最初の夢の中で舞台となっていた学校の生徒が数名ほど入院しているようだった。だが、その日は偶然にも、彼らが退院できるかどうかを看護婦が発表することになっていた。入院中の四、五名の生徒がロビーに降りてきて、そこで各人が

椅子に腰掛けて談笑している。私は彼らに挨拶をして、怪我や病気の具合はどうかと尋ねた。彼らの顔色を見ると、全員が健康そうに見えた。

彼らとしばらく談笑していると、病院の入り口の自動ドアが開き、外から看護婦がロビーにやってきた。私はてっきり、担当の看護婦は病院内にいるものだと思っていたため、彼女が外からやってきたことは不意打ちのようであった。

ロビーに集まっている生徒たちは、誰が今日退院できるのかが気になっているようであり、自分が退院できることを楽しみにしているようであった。

看護婦が私たちの元にやってくると、少し間を置いて、一人の男子生徒の名前を呼び上げた。その名前を聞いた時、そこにいた全員が少し驚いた。というのも、そこに集まっている生徒の中では、彼の足の状態は良くなっているとはいえ、完治しているようには思えなかったからである。その生徒も自分の名前が呼ばれた時、「えっ、自分ですか？」という表情を浮かべていた。その場にいた全員が一瞬唖然としたが、私たちは「おめでとう！」と述べ、彼を病院から送り出した。彼は照れ笑いを浮かべながらも、退院することはやはり嬉しいようであった。

少々足を引きずりながら、彼は看護婦が入ってきた自動ドアから外に出て行った。彼が外に出て行ったのを見届けると、そこにはまたひとり人がいなくなったというもの哀しさと、彼を送り出した喜びのようなものが混じった雰囲気が漂っていた。

するとそこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は友人四人と組んで、合唱を行っていた。その合唱はビデオ撮影がされており、合唱後にそのビデオを見た。自分が歌っている姿を再度自分の目で見ることは気恥ずかしさがあったが、面白くもあった。

四人の友人たちとビデオを見ながら、面白おかしく気づきを述べて行った。すると、私は浴槽が少し汚れた大きなジャグジーの中にいることに気づいた。先ほどまで話をしていた友人たちはそこにおらず、私は一人でジャグジーに浸っているようだった。少々泳げるのではないかと思うぐらいにこのジャグジーは広い。しかし私は泳ぐ気もあまりなかったので、早々とジャグジーから上がることにした。ジャグジーを上がったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/3（月）06:42

© YOHEI KATO 2018

3476. 作曲技術の引き出しの拡張に向けて

時刻は午後の四時半を迎えた。今は再び雨が降り始め、もうこの時間帯は随分と暗くなっている。この様子だと、もう少しで真っ暗になりそうだ。

今日は午前中に作曲理論の学習に集中し、午後一番には、協働者の方たちとオンラインミーティングを行った。現在開発中のトレーニングプログラムの内容は非常に充実しているように思える。ここから諸々の詳細を詰めていき、実際にプログラムが世に送り出されるのが楽しみだ。

早朝に日記を書き留めて以降、それからは日記を全く書き留めないほどに作曲理論の学習に打ち込んでいた。一旦ここで振り返りを行い、夕食までに一曲ほど作れたらと思う。

昨日と今日にかけて、コードスケールを学んでいった。それらを活用するために、まずは変化記号のつかないAマイナースケールを選び、そこに多様な変化記号が含まれるスケールを活用してみようと思う。

学んだことが真に自分の身になるためには、何よりも学んだ内容を活かした実践が必要になる。今日は細かな論点を随分と多く学んだため、それらを全て一回の作曲実践の中に盛り込もうとするのではなく、何度かに分けてそれらを活用していくのが賢明だろう。そうした実験的な意味合いで作曲をするのに最適な教材は、バッハのコラールや、バルトークの『ミクロコスモス」の主に前半部分の曲だと思う。明日の早朝にバッハのコラールを参考にする際には、CメジャーかAマイナースケールを選択し、諸々の変化記号が含まれるスケールを活用していこうと思う。

その他に学んでいたことといえば、和音の種類とその性質についてである。今後和音を作っていく際には、根音・第三音・第五音の主要な三つの音だけではなく、テンションノートを含めて、他の音が含まれた和音を作っていきたいと思う。その際には、和音の構成要素の中に含まれる協和音と不協和音の配分とその響きを研究していく。とても地道な実践だが、そうした小さなことを積み重ねていきたい。

今日はこれから、シベリウスに範を求めて一曲作りたいと思う。その際には、これまで学んできたことをできるだけ意識し、いくつかの項目について積極的に新しいことに挑戦しようと思う。

作曲理論を学ぶことによって、楽譜の中に作曲者が込めた意図や、そこに配置された音の意味などが少しずつわかってくる。それがわかってくれば、徐々に自分の曲に応用していくことが可能になるだろう。

作曲における引き出しを増やすためには、今後も継続して理論の学習を行い、理論を適用して既存の楽曲を分析していくということが大切になるだろう。今から参考にするシベリウスの曲に対しても、分析的な観点を必ず持つようにする。フローニンゲン：2018/12/3（月）16:48

3477. 走らないマラソン大会に関する夢

今朝は七時前に目を覚まし、ゆっくりと起床した。四時頃に一度目を覚ましたのだが、そこで起床することをせず、もうしばらく寝ていた。

今、外の世界には小雨が降っており、雨滴が窓ガラスに付着している。通りを走る車が水しぶきを上げる音が聞こえて来る。辺りは真っ暗闇に包まれているのだが、もうこの時間には比較的多くの車や人の姿を見ることができる。オランダの朝は早い。

今朝方も夢を見ていた。記憶に残っているのはわずかな部分だけかもしれないが、それでも覚えている限りの事柄はできるだけ書き留めていきたい。夢を書き留めることによって、それが後々大きな自己発見をもたらすことがある。さらには、夢は書けば書くほど、その想起力が高まっていく。そしてそもそも夢を書き留める行為自体に、治癒と変容の作用が内包されているように思う。

四時に目覚める前に、私はある夢を見ていた。夢の中で私は、ある山道の上にいた。どうやら、今から学校が主催するマラソン大会が行われるようだ。周りを見渡すと、私の友人ばかりであった。また、彼らは全員小中学校時代の友人だったのだが、このマラソン大会は小学校が主催するものではなく、中学校が主催するものだということがなんとなくわかった。

今回の大会で採用されたコースは山道を主に走ることになり、行きは登り道が多く、帰りは下り道が多い。いずれにせよ、かなり過酷なコースである。私は気負いすることなく、至って冷静にスタートの時間を待っていた。友人たちと準備運動をしたり、雑談をしたりしながらスタートの時間を待っていると、いよいよスタートの時刻となった。すると突然、スタートに向けて気持ちを高めていたにもかかわ

らず、私は今からマラソンをすることがとても馬鹿馬鹿しく思えてしまい、走ることをやめようと思った。スタートして一、二歩ほど歩いてから辞退するか、スタート前に辞退するかを考えていた。結局私は、スタートを切ることさえもせず、走ることをやめた。このようなコースを本気で走ったら、逆に体に悪いように思えてしまい、無理に体を痛めつける必要はないと思ったのである。

私はスタート地点かつゴール地点である場所から、走る友人たちを見届けようと思った。私が辞退したこととは関係なしに、スタートの合図であるピストルの音が鳴り、友人たちは一斉に走り始めた。

このコースの大部分は坂道で構成されているが、最後の数百メートルは平坦な直線であり、皆のラストスパートの様子を見ることができる。私は幾分それが楽しみであった。

スタートしてしばらくすると、私が待機しているゴール前の休憩所に、別の友人が苦しそうな表情を浮かべてやってきた。どうやら彼もマラソンを途中で辞退したらしい。彼と少し話をした後に、私は今からスタートしても、最後尾を走っている友人たちに追いつくことができるかもしれないと思った。軽いジョギング程度なら身体に負担はかからないだろうが、彼らに追いつくためには、かなり本気で走らなければならないため、結局今から走ることをしなかった。先頭を走る友人がゴールのテープを切った時、夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/4（火）07:37

No.1458: A Scent of Soil

One day in my life is approaching the end now. I'll study composition theory a little bit more, and then I'll go to bed. Groningen, 20:32, Tuesday, 12/4/2018

3478. 二つの不思議な夢

先ほどまでは小雨が降っていたが、どうやら止んだらしい。天気予報では、今日は部分的に雲がありながらも、晴れとのことである。天気予報を確認すると、今日から来週まで毎日、一日のどこかで雨が降るようだ。今日はこれから天気が回復するようであるから、昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけたいと思う。その際には、四日分の食料を購入しようと思う。

今日も一日がゆっくりと始まりを迎えた。新たに生きようとすることは、今この瞬間からできる。今日から、今この瞬間から再び人生を新たに生き始めようと思う。

今日も作曲理論の学習を中心にして時間が過ぎていくだろう。ただし、午前中には一件ほど協働プロジェクトに関するオンラインミーティングが入っている。また、現在執筆中の書籍の初校を先日編集者の方から送っていただいたので、今日は午後からそのレビューをしたい。協働執筆者の方が担当する箇所については自身で随分と赤を入れているようなので、私は自分が執筆した箇所のみに絞ってレビューをしたい。全体をレビューするのは、二校以降になるだろう。

一日の活動を本格的に始める前に、今朝方の夢の続きについて思い出していた。マラソン大会に関する夢を見た後に、私は別の夢を見ていた。夢の中で私は、見慣れない部屋の中にいた。その部屋は比較的広く、リビングとキッチンが繋がっている。私は昼食に、中華料理を食べようと思った。

食卓ではなく、リビングのテーブルの上に、どこかの中華料理屋で購入した食べ物が数多く置かれており、それを温め直して食べようと思った。電子レンジの中に一つの品を入れると、それが急激に温まっていることに気づいた。電子レンジであるはずなのだが、それは食べ物を茹でるための機械に変身しており、レンジに入れた食べ物が沸騰し始めている。慌てて食べ物を取り出すと、それはまだなんとか食べられるような状態だった。

すると、部屋の中に何人かの知人が突然現れ、これだけたくさん料理があるから、彼らにも料理を分けてあげようと思った。料理を食べ始めてしばらくすると、私は突然トイレに行きたくなり、トイレに向かった。奇妙なことに、その部屋にはトイレがなく、部屋の扉を開けると、そこは公衆トイレとつながっていた。そのトイレはとても綺麗であり、多くの個室がそこにあった。

一つの個室に入り、便座に座るとすぐにめまいがしてきた。すると私は便座の上でぐるぐると回っているような感覚がし始め、便座から落ちそうになった。すると、誰かがトイレにやってきて、私の隣の個室に入った。すると、個室の上からその人物が声をかけてきた。見ると、高校時代の友人であった。

めまいを催し、便座から滑り落ちそうになっている私に対して、彼は私を心配して声をかけてきたのである。私が「大丈夫」と一言述べたところで夢の場面が変わった。最後の夢の場面では、父と私と

で、ある投資案件について話し合いをしていた。数ある案件の中でも、そこで話題となっていたのは暗号通貨に関するものだった。

保有している暗号通貨の一つの価格をチャートで確認してみたところ、横ばいで価格が推移していた。リアルタイムでしばらくチャートを眺めていると、突然価格が下落し始めた。しばらく下落したところで、今度はその下落幅を大きく上回るほどに価格が上昇し始めた。それは途轍もない値上げ幅であり、父はそのタイミングで売却した方がいいのではないかと述べたが、私はその価格は当初決めた売却価格の半分であることを理由に、そこで売却をしないことにした。

二人の意見が食い違ったので、私はこのタイミングでの売却がふさわしくない理由を述べたことに加えて、自分が大学時代に金融を専門的に学んでいたことも強調した。その後、チャートの価格が異常な上下動をし、そこからも絶えず価格が上昇していくという現象が起こった。そして、瞬く間に、私が当初から売却タイミングにしていた価格に到達した。当初の予定通り、そこで売却をしようとしたところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/4（火）08:08

No.1459: Morning with a Dim Light

Now it is 9AM, and it has become light. I can see some frost on the roof of a red brick house. I aware that a new day certainly has begun. Groningen, 09:05, Wednesday, 12/5/2018

3479. 久しぶりの太陽の光を浴びながら

先ほど昼食を摂り終え、これから午後の活動を始めようと思う。今日は朝一番に協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあった。ミーティングの前に再度資料を読み返すことを行っていたことと、今日はそもそも起床時間がいつもより遅かったこともあり、作曲理論の学習を午前中に行うことはできなかった。しかし、早朝の作曲実践に関しては、時間をずらして午前中に行った。作曲理論については午後から学習を始めたい。

とはいえ、今日は作曲理論の学習に多くの時間を使うのではなく、現在協働執筆中の書籍の初校のレビューを完成させたい。これからいつものように仮眠を取ろうと思うが、仮眠後には、一時間ほど作曲理論の学習を行い、その後に書籍の原稿のレビューを行う。特に、自分が執筆を担当した

箇所のレビューを丹念に行う。原稿を編集者の方に送る段階で、各章の合間と章末に執筆したコラムについては、誤字脱字を含めて何度も読み返している。そのため、午後のレビューにはそれほど時間をかける必要はないかもしれない。

本文へのレビューを終え、プロフィールを最新版のものにしたら、編集者の方に修正依頼項目についてメールを送っておこうと思う。明後日の午後をめどに、本書のあとがきについても執筆しておきたい。それは分量として多くのものを書く必要はないが、改めて本書の意義について振り返り、それに言及する形であとがきを執筆していこうと思う。

早朝起床した際には小雨が降っていたのだが、明るくなってくるタイミングに合わせて、一切の雨雲が消えた。午前中から今にかけて、清々しい空が広がっている。ここ最近は天気が悪かったため、久しぶりに太陽の姿を拝むことができている。やはり太陽の光はいいものだ。身体的にも精神的にも、太陽の光はエネルギーを与えてくれる。今日は引き続き晴れ間が続くようなので、太陽の光を浴びながら午後の仕事に励んでいきたい。

仮眠を取ってからは、昨日の続きとして、和音の配置を扱うボイシングに関する学習を進めていく。一つ一つの項目を理解しながら進めているため、学習の速度は遅いが、学習項目が確かに我が物になりつつあるのを感じている。一時間の学習でどこまで進めるかわからないが、少なくともボイシングについては今日中に学習を終わらせておきたい。ボイシングの学習が終わり、書籍の原稿のレビューを終えたら、転調をする際に重要になるドミナントモーションについての学習を開始する。まとめノートを取りながら、そして学んだことを作曲実践に活かしながら、少しずつ理解を深めていく。
フローニンゲン：2018/12/4（火）13:31

3480. 世界一周の船旅をしながら

時刻は午後の七時半を迎えた。つい今しがた夕食を摂り終えた。ここから就寝までの時間を使って、まずはバルトークに範を求めて作曲実践を行う。楽譜の書き込みを今眺めてみたところ、バルトークのミクロコスモスに範を求めるのは、およそ四ヶ月ぶりだということがわかった。ここからバルトークのミクロコスモスを参考にする際には、これまで学習してきた作曲理論を積極的に活用するようにしたい。仮説を立て、それを実験するような形で、学習してきた事柄を実際に活用してみる。何がうまく

いき、何がうまくいかないのか、そしてどのような要因でそうしたことが起こっているのかを分析していく。こうした内省的な実験及び実践を日々積み重ねていく。

作曲実践を終えて時間がまだ余っていれば、作曲理論の学習に充てたいと思う。今は文字通り、作曲理論を爆発的に学び、爆発的に曲を作りたいという思いがある。今は諸々の事柄に従事しているが、これからの人生においては、自分が果たすべき役割に基づいた活動だけに専念していきたいと思う。今も当然ながら、そうした活動だけに従事する形で日々を送ることができている。だが一つの予感としてあるのは、あと数年以内に、日記を書き、曲を作ることに専念した生活が始まるのではないかということだ。

今日は天気が良かったため、昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけた。その行き道に、世界一周の船旅の際には、世界中のあらゆる場所で、日記を書きに書き、曲を作るに作る日々を過ごしたいと思った。そうした船旅について調べてみると、長いものでも100日間ほどのようなので、100日間、この地球上のどこかで毎日大量に日記を書き、大量に曲を作っていく。

自分の内的感覚をより明確に表現するためには、日本語についてもまだまだ修練が必要である。一方で、作曲については本当にまだまだである。あと数年以内に、今日本語を用いているような程度に曲を生み出すことができれば幸いだ。そうした状態になってから、世界一周をする船旅に出かけたいと思う。自己及び地球を定点観測するという意味において、最初の船旅以降は、四年に一度の感覚で世界一周の船旅に出かけていく。そのようなことをふと、スーパーに向かう最中に考えていた。

今日は夕方に、無事に書籍の初校のレビューを終えた。細かい言い回しなどでいくつか修正点があったが、それほどまで多いとは思わなかった。今回の書籍では、共著者の方と書籍の構成を一緒に考えたり、全体の監修、及び随所随所にコラム的な解説を入れることが私の役割であった。全体の分量から言えば、10%ほどが私の執筆担当である。

今回のレビューは自分が執筆した部分しか対象にしていないため、修正箇所もそれほど多くなかったのかもしれない。明後日は、書籍のあとがきを執筆し、今週末に共著者の方にそれを送りたいと思う。フローニンゲン：2018/12/4（火）19:44